

昭和30年代、私の大学時代、街には貧困が溢れていた。しかし、うらぶれてはいなかった。努めれば貧困から脱出できるという光明が灯されていた。

甲府のわが家に帰省すれば、電気洗濯機が、次の年にはテレビが、その次の年には電気冷蔵庫が備え付けられていた。電の煤で黒光りするお勝手に真っ白い冷蔵庫が構えていかにも不釣り合いなたたずまいが懐かしい。高度経済成長という表現には確かな臨場感があった。世の中は前方へと着実に進んでいた。

昭和30年代を振り返る

この30年代は安保紛争にも彩られた。紛争が終わって首相が岸信介から池田勇人に代わり、昭和36年以降の10年間にGNPを2倍にするという所得倍増計画が公表された。

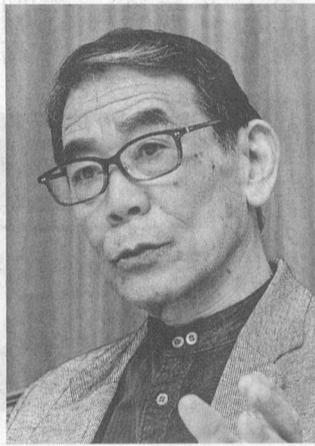
そんなことあり得るかトジャーナリズムは訝ったが、目標は6年で達成されてしまった。大型高炉を擁した一貫総合製鉄所、パイプラインがループを描く石油化学コンビナート、いかにも合理的に設

五輪、時勢達観の精神発揮せよ

えられた自動車組立工場、それらを報じる新聞を私は誇らしい気持ちで眺めていた。

新幹線、首都高速道路が建設され、東京五輪が開催された。GATT11条国、IMF8条国への移行、OECD加盟がなって日本は名実ともに先進国へと浮上した。日米のイコール・パートナーシップと当時よくいわれた。敗戦下の貧困と混乱の中で育った私などには、よくぞここまでという高揚の気分があった。高揚のピークが東京五輪であり、日本の戦後復興の成功は五輪によって証された。経済ナショナリズムの時代だった。未曾有の経済的高揚の直中でありながら、ジャーナリズムもアカデミズムも不思議なまでに強く反体制的であり反米的であった。日米安保条約が標的とされた。しかし、安保闘争が隠しもっていたものもナショナリズムだった。ナショナリズムとは、他者に投影して

正論



拓殖大学顧問
渡辺 利夫

自己を確認し、他者に対抗して自己を主張する民族心理である。

熱狂の時代が去って

日本という自己にとつての他者とは米国であった。他者が強大であり、しかもこれがかつて自己を

押し存在であつてみれば、自己の存在を訴える対象としては申し分ない。青春期日本の「通過儀礼」だったのである。経済復興と安保闘争の昭和30年代、このあたりが昭和「坂の上の雲」だったのでないか。

精神にはある構えがあった。この時代の日本人の集合意識がナショナリズムだった。

しかし、OECD加盟、五輪開催を経て、日本人自身が自らを自立国家だと認識し、国際的にもそう認知されたその頃からである。日本人はあのひたぶるの勤労の時代を終え、さまざまに思い煩う惑いの国へと変身した。実際、48年には第1次石油危機に襲われて20年にわたり続いた高度経済成長は終焉した。

新たな時代の幕が開く

国家意識を希薄化させ勤労に重きをおかない若者が生まれた。軽薄なジャーナリズムの思潮も加わって、日本人は戦後20年間の方向感覚を喪失していった。「東京五輪1964」は、はるかに遠い過去の物語となっていた。

平成に入る頃には少子高齢化が著しく、高齢者を支える現役世代(労働力人口)がピークを越えた。この間、経済活性化を求めてさまざま策が講じられたものの、実体経済の動きは鈍かった。政策に対する感応度が個人からも企業

からも失せてしまっていた。「東京五輪2020」が眼前に迫った。前回の東京五輪が戦後復興を象徴する大会として設定されたように、今次大会は東日本大震災というあの未曾有の惨劇からの復興を象徴する「復興五輪」として設定された。しかし、悄然た

り。ここで日本は新型コロナに襲われ、これから身を守りつついかに「安心・安全」の五輪を成功させるか。政府や国民の姿勢は、あの弾けるような歓喜に胸を躍らせた昭和39(1964)年の五輪とは対照的に、無事をひたすらに祈る消極的なものへと変じてしまつたかにみえる。

私どもはかつての五輪の時代のように若くはない。しかし、その分、高齢の者が持ち合わせるべき時勢を達観する精神を発揮しなければならぬ。この難局を、リスクは覚悟しながら、それでも大事には至らせざることなく、ウィルスとの共存の時代の幕はやはり日本人によって切つて落とされたのだ、後世の人間からそう評価される大会にしようではないか。

(わたなべ としお)

オピニオン